

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	徳原 悠介
論文担当者	主査 松永 寿人
	副査 道免 和久
	副査 越久 仁敬
学位論文名	Changes in clinical features of multiple system atrophy in Japan (多系統萎縮症の臨床像の変遷)
<p>多系統萎縮症(multiple system atrophy; MSA)は、無動、固縮などのパーキンソニズムや、歩行時のふらつきといった小脳失調、尿失禁や起立性低血圧などの自律神経症状を呈する成人発症の神経変性疾患である。診断時に小脳失調を主とするMSA-Cと、パーキンソニズムを主とするMSA-Pに大別され、本邦ではMSA-Cの割合が67-84%と優位とされてきた。しかしこれらの疫学調査は2006年以前のものであり、MIBGシンチグラフィなど画像検査の発展や高齢化の影響が十分に反映されていない可能性がある。</p> <p>そこで発表者らは、当院において1989年から2018年の間にprobable MSAと診断された患者を1989年から2003年に診断された群(A群)と、2004年から2018年に診断された群(B群)に分け、病型分布や発症年齢、性差、初発症状、画像検査所見などについて後方視的に調査し群間比較を行った。</p> <p>その結果、全期間においてprobable MSAの診断を満たした80例(男性; 42例、女性38例)中、A群が29例、B群が51例であった。病型分布に関しては、A群ではMSA-C25例(86%), MSA-P4例(14%)で、B群ではMSA-C 32例(63%)、MSA-P 19例(37%)であり、B群において有意にMSA-Pの割合が高率であった(P=.039)。平均発症年齢は、全期間ではMSA-P(65.3歳)がMSA-C(60.0歳)に比して有意に高く(p=.0039)、またB群(63.3歳)がA群(58.4歳)に比して有意に高齢であった(P=.013)。このことは、MSA-Pの割合の増加に高齢化が関わっている可能性が考えられた。MIBG心筋シンチグラフィはB群の21例において施行したが、MSA患者ではParkinson病(PD)患者に比して、H/M比が有意に保たれており、両者の鑑別に有用と考えた。しかしMSA患者においてもH/M比の低下を認める場合があり、結果の解釈は臨床症状を含め慎重になすべきと思われた。</p> <p>以上の結果から、高齢化に伴いMSA-Pの割合は従来考えられた以上に増加しており、特にMIBG心筋シンチグラフィの導入によって、PDとの鑑別がより鋭敏になされるようになった可能性が示唆された。剖検例を含まないなどの問題点はあるが、最近のMSAの臨床像や疫学的データを明確にした点で、本研究は学位に値するものと評価された。</p>	